

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第4回/朝香宮家の人々(後編)

Residence of Prince Asaka 1933—

白金台の地に新宮邸が完成したのは、昭和8年(1933年)5月のことでした。計画から竣工まで足かけ4年に及ぶ大工事でしたが、この間鳩彦殿下は頻繁に工事の現場に足を運ばれ、時にはご家族を連れてコンクリートが打ち上がったばかりの邸内をご見学されるなど、完成を心待ちにされていました。計画にとりわけ熱心に取り組まれていた允子妃殿下も、新宮邸への引越の折には自ら陣頭指揮を執られ、高輪時代には飾る場所もなく蔵の中に眠っていた様々なものが、それぞれ所を得て生き生きと輝く素晴らしい家が出来上がったとご家族のお一人は回想されています。

せせらぎに沿って鶴舎があり、ドイツのハーゲンバック動物園から贈られた白孔雀が放し飼いにされていた庭園の一画には、テニス・コートが設けら



鳩彦殿下米寿記念の銀製ボンボニエール(ボンボン入れ)。中央に殿下の「お印」*に因んで鶴が彫られている。昭和49年(1974年)個人蔵

れていました。鳩彦殿下は大変スポーツがお好きで、パリで事故に遭われるまでは登山やスキーなどで積極的にお体を動かされていたようです。事故で足を悪くされた後も、時々にご家族と一緒にこのコートでテニスを楽しまれました。允子妃殿下も絵を描かれたり刺繍をなさったりと多彩な趣味をお持ちでしたが、とりわけ両殿下揃って好きだったのはゴルフでした。このお二人共通のご趣味は、一般に「ゴルフの宮様」と称されるほど有名で、各地のゴルフ場で始球式に臨まれたり、時には朝香宮杯としてカップをお出しあさかになられたこともありました。現在の埼玉県朝霞市の名称



事故後、パリで静養中の両殿下 大正13年(1924年)頃

は、殿下が名誉会長を務められていた東京ゴルフ倶楽部のコースが、昭和7年(1932年)に世田谷からこの地に移転した際に、殿下の宮号に因んで改称されたものといわれています。

新宮邸への引越の慌ただしさも一段落し、夏が過ぎた頃から允子妃殿下は体調を崩され、この年の11月に腎臓のご病気のために42歳の若さで薨去されました。新宮邸に移られてからわずか半年後のことでした。この後お子様方もご結婚などで宮邸をお出になり、お一人になられた鳩彦殿下は、戦後の昭和22年(1947年)、他の皇族方と一緒に皇籍を離脱され、お住まいを熱海へと移されました。熱海での殿下は、お好きなゴルフをお続けになりながら晴耕雨読の日々を送られました。殿下の耕される畑には季節の野菜が沢山でき、これをお子様たちにお配りになることを何より楽しみにされていたということです。

鳩彦殿下は昭和56年(1981年)4月12日、老衰のため93歳のご生涯を閉じられました。ご葬儀は皇族方の墓所である大塚の豊島ヶ岡御陵で営まれましたが、お通夜は想い出深い白金台の地で執り行われました。旧朝香宮邸にとってひとつの時代の終焉でした。(牟田)



朝香宮家のご紋章が入った銀製カップ 昭和6年(1931年)
(鈴木十三男氏/青梅きもの博物館館長より寄贈)

*「お印」…皇族や旧華族家において、それぞれの身の回りの品々に付けられた判別用の記号のこと。鳩彦殿下は「鶴」を、允子妃殿下は「徳」の字を用いられた。